和漢文藻

銘類　傳類

弔祭類

七

和書門

類	號	函	架	冊
	二七一九一	一九一	一一	七

内閣文庫

書	類	號	冊	函	架
和		二七一九一	七	二〇二	一一三

内閣文庫

番號	和 27191	
冊數	7 (7)	
函號	202	306

国立公文書館
National Archives of Japan

○銘類

鑑塔銘　並序　　蓮二房

今歳享保丁酉秋八月十六日有當先師亡名之七回忌則構一間四面之墓耶而祠堂曰文星観居謚名曰梅花仏歴然則此塔之為鑑也圓直一尺之寸而面布者殿今之謚名背布有含誌并與月矣其地者含造立義濃国山縣郡之輪山之西

明治十二年十月之交

北黄山禅刹之塔頭梅泉庵之西圃止乎山有徒本備水竹之奇麗而先師一家之菩提寺也抑謂文星意者出一行禅師之一掌經而天文星者我師之主命也其頌曰余遇天文秀氣清潤腹文章錦繡成云々然則我師之所遊文章天生文質而非吾輩之可議冥夫觸月花之折也則憂麼無神助之揉乗耶祖翁常称我師之文学而以彼之文章換我之俳諧則我者可遊文章彼者可狂俳諧與者人麼有年柔之遊品而文章者慰之起卧俳諧者交人之好悪則也拗祖見雖波之遺快了則文章又故者在武陵而乍預扶風之文庫可任我師之顯換與手誠思北等之貴命則今悔讃文星之二字而可不題祠堂之面門矣耶梅苍佛之之字者乍師之摽號不峯在世之名數者所憚自称之横柄也乗斯而鑑之乗用也人之視之愛之人之視之憎之憎愛者唯在人之奸醜而鑑者従本無心也則爰建置一面之鑑塔而世々將

字我師之本情與也率哉録先師之行状
則入学者延寶之始也乘其頃詠山寺之
紅葉迸裁入伊呂波之詞而爲響勃之三
尺各者年漸十一之秋也来爰俳諧之
臘則尤謂之十六年矣斯而不撓世上之
是非募東華西華之名而東者無拓鴻
之侍人麼西者蹴筑紫之不知浦山而潛
身於憎愛之隅了則置心於虚実之岐矣
乘葛松杂布者繕俳諧之皮毛居續五論
布者調俳諧之姿情歴其外夜話云日記

云十論者增而闡白馬之眼蔵而論俳諧
與誹諧之有差別古今事了則從矣儒仏
老荘之兼学者敢詩歌連俳之間出習當
時称成茄子瓢子之宗近而不令其歯着
其衣假令可爲我門之荷擔人麼古色者
鉢口新輩者敲耳而憎愛者例之無定時
帛矣尤有者不察建立之意地相手鑑之
録坊而認屋認實則也爾有則從彼忘此
從此忘彼也則千歳之後者可拜此塔矣夫

銘曰

鑑本無相　喻物有心
風吹虎嘯　雲起龍吟
可魚遊水　不鳥擇林
文章雖操　錦繡易紅
同見如礫　心間似金
交和千淑　叶訓與音
曾家無仮　孔門有參
勸温甘竹　懲厲人葵

其虚其實　桟鋒凜々

○註曰△輪山ハ清浦伐双帝ニ於国府ニ輪ノ
山形の由係ニ〻〻〻る千弗の宮所ニ通夜物語ノ
表ニ出タリ△黄山ハ北野ノ辺寅ニ在テ山ヲ雲黄ト
云イ寺ヲ大智ト云フ鷲見義作守ノ建立ニテ玉浦一流
ノ本山ナリ境内八七万五千坪ニシテ所々ニ十景ノ名ヲ
備フ雲土園ハ寺内ノ栽園ナリ塔頭ハ十二坊アリテ
極泉ハ其一坊ナリ其名ヲ下谷ノ清水ト云テ一郡
無双ノ霊水アリ蘇ハ総テ竹ト枝トナリ　△行禅師
ハ宮ノ高僧傳ニ在テ古文ノ知識トノ一章経ハ此禅師ノ
作ニテ僧家ノ才子ヲ養フ時ニ其八子ノ吉凶ヲ定ム

書十リ始ニ命官国ヲ出シ次ニ八十二星頌アリテ文星八才六ノ主命十リ題ニ八仙道天文星トアリ其頌曰命遇ハ天文ニ秀氣清聰明智慧意惺々田地ハ安秀身清吉ナリ満腹文章錦繡成ル

其誌星主命聡明作利学識遇人作事和為若逢ニ貴福藝相助者定為数魚頭独占ニ虎榜登名金階玉階之人也若得ハ権刃者文武多才乃為上命若遇ハ破厄孤驛及犯重有乃多学少成不為書筆文墨之業必為雲遊湖海之人乃手藝術士之下命也

掉尖ニ貴福以下孤駅三テ九子八仙道天貴星ト云ハ雲道天駅星ト云ハ十二星ノ各自リ去ル八年月日特ジ以テ

掌中国ヲ筆ハ四ニ或ハ天貴ノ吉星ニ遇ヒ或ハ天駅凶星ニ遇フ国ヲ筆ハ二師傅アリ細筆ハ二暇アラス

天生ノ羅質難肖業

●謝吏運傳嘗於永嘉西堂ニ題詩竟日不就忽夢見惠連即得池塘春草生大以為生常云此語有神助非吾語也

●長恨歌

今論孝辯抄ニ難波ノ貴遺快七通アリ中ニ横折一数八貴遺物覚書ナリ才五ノ書ニ八一文字ノ如ク稲ノ支考ヲ以テ

△文星観之字八撰額ニテ焼桐ニ絣青ヲ入テ六皇論ノ篆字ナリ筆者八賀金城ニ聞フ八富田太椿ナリ本ヨリ歌ヲ名高シテ古篆新篆ニ委シク或ハ八分韻府ヲ著セリ

△梅巫佛ノ三字八草躰ナリ和泉ノ青石ニ白河石ヲ以テ

臺トスニ三里ニシテ五丈餘アリ筆者ハ洛ノ井出一適ナリ
此花ハ井出家ノ嫡流ニテ越ノ福居ニ産シテ洛ノ淳風坊ニ
住メリト卓犖不羈ノ風人ナリトソ　●伊呂波ノ歌入ハ獅子
庵遺稿ノ夜話ニ新古今ノ序ニ云ク
とてとてハ色もそふよりちりぬるを
阿波やとて毛服ニ出の常きもあさきゆめ秋風と所のうち
さらさて我後文の古風を学ばしかくうたてとちつる
孟母ならんてひもけ有ちあれハ今のあさくらを知の
文覚も世にさてすてもしはり梅ハ夜話ハ祖翁ノ
遺訓ニ我滅後九年ニシテ俳諧ノ上手モ出ヘキ哉ナリト
宣旨ノ其ハ訓ノ評詞ナリ△勝王図記ニ勃ニ天微命ト云ハ
書生云ヘ天微命ハ臺部ノ背ヲ云ヘリ　△本朝文鑑

十名説ニ東ノ方あそふけて東筆坊とてあるあり
西筆坊とて筆ノ子ハ栄色ヤ色トアリ其始ハ芭蕉集
トスイ西芭蕉集トスル東西二集ノ名ニ擬シトソ△侍人モ
工知モ古歌ノ哉入ナカラフ知少トハ此ノ松詞ナリ
△菖松原ハ奥州行脚ノ俳諧ニテ△續五論ハ筑紫行脚
ノ貴遺訓ナリ續字ハ菖松原ニ續リトソ△東西夜話ト
云ク自ノ日記ト云ハル何モ俳諧ノ附方ナリ△俳諧十論
ハ芭蕉泉ノ大綱ニシテ白隠ノ要文ヲ挙タレハ佛家ノ
正法眼蔵ト云ク涅槃妙心ト云キナリ△鑑ヒ影坊ハ二篇
ノ結語ナリ△接スルニナ論以下ヨリ認屋認ニ三ハナ論
一部ノ註釈ナリ儒仏詩歌ノ傳ヲ影ノ断リナ影坊ノ
二字ヲ以テ例ノ言語ヲ散ヒタル談ハ訊諫ハ更ニ言ハス

徴中解紛ノ絶妙ト称スヘシ千歳ノ二字ハ太玄経ノ取意ナリ

銘ノ解

△魚鳥ノ一對ハ詩経ノ取意ニシテ魚ハ鳥ノ天遊ヲ云トキハ魚ト鳥トヲ自他ニ成セル此等ハ摘採ノ筆力ニテ格ニハ翻轉ノ絶妙ト称スヘシ或ハ扶林トハ後間扶木鳥ハ持隨トモ云ヘル例ニ古語ノ取意ナリ　△文章錦繍ノ一對ハ一常経ノ頌文ナカラ難易ノ二字ノ働ヲ見ルヘシ　△曾孔ノ對ハ顛倒格ナリ孔子ノ道ハ曾參ニ傳ヘ曾參ノ道ハ子思ニ傳フ仮ハ子思ノ名ナリ按スルニ此一對ハ祖翁ニハ東華坊アレト蓮ニニハ子思ナシレト銘者ノ辞文ヲ演ナカラニ人ヲ以テ四名ニ對セル顛倒ハ例ノ常法ニシテ文ニ錯綜ノ絶妙ト称スヘシ勧懲ノ對ハ字意ノ働ナカラ温塵ノ奇麦ヲ尽セリト云ヘシ

○按ニ云此銘をおほく実録にして我師の生涯をあらはし且又師の命にて作る所なれは世にある門人として百世の名をもとゝむる事をさとし給へる遺稿の秘記なり此銘は後の名を知らしめ給ふ筆也其文を一々説くに及はす此は師の名を見て会得すへし破邑孤駅の辺にても風雅に逢ひし人はなつかしき術士の如くにあつて世に知られたる我師の名を高く尊みし人は我祖師の学をさとして俳諧の大宗師と申すべきこと也

瓢ノ銘　並序

天章吹

世間よ庚申のおこなひとてきゝもてあそふむかし　△視聽言

の三蔵より三疋の猿を拵へ写し視さう聽さう
言さうのみちうしなはれうまいとりて禍と
の門あれつし△唐北廟はるかにはなくまたしも國の
そなはむまとやてしこと言とたくさむの他人今れよい
ものこと行ちと北を近くも関に藤と下和と
拙つく居させし秋の風そと秋京の森の蔵
あるをや京ひをうたこ蔵とそなて耳と月を
あきけの蔵して△清水寺寺色を知さてをひ
なはを知をむやがんつとりて見言いやまて
をくこと行てをのうち言ふ例のかなりて今はも

後はそれ他諸人にてとなりあいとをあむ
をそをちうを言諸のあをふうは自己をを自社
とかつりえれいをを知をかつりて知をうをと在右
の孫ふをこと行てをなの蔵ふあをを

銘ロ

孫ふくを汝を用ふあく耳をあれて△繋而
不食やしこと自慢の他にあれいのよいもも此
名をあるををををををとたくをを
孫ふくを拙こ塵寅の要あれいお光の塵

はなとして懲され鮎をおさめ庵にも浮
され庵にもちてこちらの用なりとや
瓢よく▲許由は鳴と憎めし▲空也を鳴と
おもふれし△韓愈かな達をおもふれ
ち用よそ鳴ぬとてや平なれてはまゐる
秋のもろもろの物鳴るときこゆるよしさとひ
△又石の大いなるもみてよはものゝさんにより
厳へなりつとて俳諧の洒落とみされしも
○註曰△視聴言動ノ四箴ハ前ニ出タリ△家語ニ観周ニ
入太祖后稷之廟ニ有リ金人焉参緘其口ヲ銘ニ曰古ノ之

○
慎ハ言ヲ人也 中略 口ハ是禍之門也ト云 △関口ノ辯ハ前ニ出タリ
△論語ノ異端ノ註ニ當ニ如ク淫声美色ノ以テ遠之ト云 巧言ノ二
字モ論語ノ詞ナリ　△論語ニ吾豈匏瓜也哉
焉能繫而不食ト云　〔銘解〕▲許由カ瓢ハ隠逸傳ニアリ細挙
ニ及ハス▲空也ノ鉢扣ハ高僧傳ニ在リ細挙ニ及ハス　△韓文
送孟東野序ニ大凡物不得其平則鳴以鳥鳴春以雷
鳴夏以虫鳴秋ト云▲按スルニ此一段ハ鳴ノ字ニ言語ヲ形容セシカ
韓子カ神鳴ハ憎愛ノ結ヒニテ此等ヲ文中ノ文ナカラ漢ニハ
筆端鼓舞ト云ヒ倭ニハ筆ノ台ノ絶妙ト称スレ△荘子魏王
貽我大瓠之種我樹之成而實五石ト云△倭語拾芥口
瓢へなりとそろくと識伊達ちり学者の沙汰よりよりて樣也
係云ば給を克己のことも志なく一生涯の糸とる子た

猿ゝ祝聴言めことを起して躰ゝ言のてにをはてよそ
謀ゝたたはの嗜とする事作者と越の福井ゝ庵
て俳諧ゝ一味の名ありけると天井ゝって有底窩
と標しろもし昨嚢伯兎ハ忘年の友なりとそ

俎板銘

岸昨嚢

日新亦日古　朔云亦晦云
竪象一年住　横準四時膳
之日節獻鶴　七種粥囃芹
憲王何遠厨　孔子未学軍
子ハ攘羊隠文　臣ハ享見饗君

柳鱈身歙滑　解鱠鬆爲斷
鎌矛頻令響　納豆坐所聞
天命畏河豚　我生宜海雲
争忘菎蒻鏽　縦嗅雉雑薫
寧識無絃趣　質而且有文

註曰△書経湯之盤銘曰日新日々新按スルニ此發語ハ俎板ノ日用ニ六藝ノ睛アルヲ云ハントテ新古ノ二字ニカヲ添タリ△論語ニ云ル吉朔ノ饌羊ハ俎板銘ノ寄セニシテ多ニハ晦朔ノ佳節ヨリ年月時ノ日用ヲ見ルへし△之日節ニ鶴ノ庖丁ノ事ハ奉膳式ノ沙汰ニヤ及ヘし△七種式ハ挙ルニ及ハス△孟子憲王ノ章ニ庖ニ有肥肉ト云ヽ宣王ノ章ニ君子ハ遠庖厨ト云ヽ按スルニ此一句ハ荘子ニモ

梁ノ恵王ハ庖丁ノ所伝アレハ宣王ノ如ク庖厨ハ之ヲ遠ストス同書ニ
同語ヲ飜轉セシ所等ヲ奪胎ノ絶妙ト称スヘシ△論語ニ
俎豆ノ之事ハ則嘗テ聞ク之ヲ矣軍旅ノ之事ハ未タ之ヲ学ハ也
▲論語ニ父攘ム羊ヲ而子證ス之ヲ子曰父ハ為ニ子ノ隠シ子ハ為ニ父ノ
隠ス直キ在リ其中ニ矣▲史記ニ桓公曰易牙亨テ其子ヲ以テ快ス
寡人ニ尚可キ疑フ邪擇スルニ所ノ對ハ羊ニハ俎豆ノ孝行ヲ含ミ
兒ニハ饗食應ノ忠節ヲ顕ハス君臣ハ父子ノ字對ハ更ニシテ
文ニハ意對ノ絶妙ト称スヘシ　△論語ニ畏ル天命ヲ畏ル大人ヲ
云擇スルニ所ノ對ハ公私ノ二用ヲ云ナカラ何豚ト云イ海雲ト
云ル物名ノ働ヲ見ルヘシ　△白馬ノ談笑訓ニ色を好むを
温飩のごとくまよし蕎麦切のごとくまとへうもて一豆に屠る
へ和ごりの所ありて蓖比翁らは俳諧のさとれありとぞ

△論語ニ山梁ノ雌雉時ナル哉時ナル哉子路共ス之ヲ三タヒ嗅イテ而作ツ擇スルニ
所ノ一對ハ雌雉ト八雉子ノ雌鳥ヲ云ヘト蓖比翁ノ連綿ニ對セン
トテ論語ニ嗅ノ字ヲ假ナカラ雌雉ト一名ニ訓シタル所等ヲ
擒語ノ絶妙ト称スヘシ　▲陶明本傳ニ常ニ撫ス無絃ノ琴ヲ
曰但識ル琴中ノ趣ヲ何ソ労セン絃上ノ声ヲト云△論語ニ質勝ハ文ニ
則野ナリ文勝ハ質ニ則史ナリ文質彬々トシテ而然後ニ君子ナリ
○陶公所路を七句十韻にて文飲韻のとゝのふへと
ありて字も秋の韻礎とありにきて漢文
てさへ作て俳諧あり是れて狂詩と俳諧との平仄
あらへとある一も名持て一篇の称をなす所法て
俎板の容となして常ゝ魚ゝなる此寓きと求む
より出て蓖比翁のさいとせらし又風雅の飄へと

これやこれを諸子文所収にしてあるはそれ歟の
賓とおもふいあるはを此沿の屋にあそびてそを
我いの文者とつゝしみ

本箱ノ銘　並序

菅師冬

久しくは天地と文庫とを中に月はなれをと
かくれいとかゝるものつゝにはなれてを写いこれと
ゝもこれを一日帰るもり要人をこを一日あるに
見人をまこゝにはいてはゝを六芸の名に
あつてをまに傳いつい伝をいい調のをゝんの嶽あり

丁千枝一方葉の拾書をあれりまりまれいあれの
おもあしをまを枝のをまをれをまを池の張しをを
おをを雲のをらふひをまを枝をををを子文の
ををををれを達子大師を蟲ノ祝書此をを枝を
葉ノ神の鍬ノむつをををを一ををを
のをををを此をのを沿をあれを我を隆を
をををあいて脇此偶ノ拾をり傳書師師を
ばをれを沿をふをををを貪をあをを
眠ををを此の屋をを沿ををををを
ををを一沿方面の沿沿をあををを千蓋を

あげなる事とさるの

其銘

智恵をはらん者は世よ　假名と書るよ所ゆふ
板の上ちり拭ときつゝや　桐の葉き歌やうく
扨〻▲鮒の目をはやとはる　▲あよ花のいろはちつる
▲曹般ゝやは拵ゆとも　▲竹田ゝ手ゝ筆て遊ゝ
鮒けるなくなれゝ代を　△むゝはたくゝ山ゝ桂

○註四△平文子ニ万事帰スニ云ヘ碧岩録ニ方法帰スニ云ヘ▲蛍雪
故事ハ前ニ出タリ　△達ノ六門集ニ心傳ニ不立文字ノ

▲普書ニ郝隆七月仰ス庭ニ曝ス腹中書ヲ云ヘ
其銘　▲荘子ヵ蝶ノ夢ハ前ニ出タリ▲野語述説ニ勧学院ノ雀
八学ヲ求ル囀ルト八野語ノ説アリ　或ハ云雀ハ即僕隷各セトモ
或ハ云学院園中ニ有ル黄鳥ニ呂礎非熊ノ字ヲ託ス
△淮南子ニ曹般仕テ楚王ニ作ル雲梯攻宋ヲ云ヘ▲竹田ハ倭朝ノ
細工人ニテ多ク和漢ノ対セン事ヲ好ム　△倭語抜ヌ
の剣今ハ業門ト盛衰の変化とハ是ハ
○注ニ云ハ流ヲ隙見の学ハあるて虚ヲ求ル
ヲ学ハ流ヲ不ル　やと儒仏若ハ和漢の書籍ヲ買い
あつめて博学の名ヲ求ムれ　ヲ書れの達人と郝隆
ヲ求ムるの人の狂ヲ用ヲ捨ル事ヲ
へきやや没や殺と剣との鏡縁ヲ例ヲ笑中の刀ヲ

〇作者を書きて別に木牛兒と猿手を尾城の八品觀と称して書をとくし爾をとくを童名と万能磨といふ

紙絵い謎文すり評註
ニハ及ハス獅子庵ニ
五寶ノ其一より

炭取銘

花をえらびてもろく
実を文いりて作し

物ゴを人

蠅打銘　並席

晴一秋

かはらを打物のそれ抜もとる寶とそれ改古

とかるひるるとそれ鉄炮とかひたりかゝをおとし
たゝきちへそゝちに人と殺さんすとそふまんを人
かゝむゝて防くゝゝ長城を一炬の火地油ひかりもちりて夫亦
長城を一炬の火地油ひかりもちりて夫亦
いたの一字とかゝて魚とそれ掴とかるもと
射とゝも城とちひやゝそれ砲とたり圍亦
とゝゝそれ物とたゝちりまるとも家あひ
あゝ政陽殿を鍋とかくそれ模拓の亦地術
とうらへ炮烙の扇と穂とめりて書く殺
たくさむとたゝちを軍と社席るかそれ門の

教ゝあるきやうこゝを作はの繩打をうらゝ
かりく敵右とおゝあるゝをへやゝいふ所法炮のゝて
をと繩打とゝいふ(きを)やゝ繩をゝれゝいふ所をゝ
をれゝをらも柄ゝ作て口
殺するゝあられ敵をぬきゝ所
打するゝあられ繩をゝふ所
胡(ナンコウ)馬不仁ちやし
與叔ら克己の語あり
○註曰(ニ)たれく什(ニ)盃とゝれ酒とゝのへ賓とゝれへ
擬(ギ)うむすとゝをゝ按スルニ此對ハ鉄炮ヲ見ハトスキニ

身ト賓トノ字ヲ對ノ倒・將ノ絶句ト称スレ▲表ヲ三長城
ノ作キ史記ニ出タリ△一炬火ハ阿房宮賦ニ在リ炬字
ヲ炬トハ和訓ノ習俗ナリ△論語ニ釣而不綱弋不射宿ヲ
△中庸ニ愼ム其独ニ也△愼繩賦ハ欧陽公ノ作リ愛ニ
ハ殿ノ一字ヲ称スレ△永詔ニ其征也還(スヤ)仲(ナラ)往帰之
上ニ云テ△與叔克己(ヤ)銘ニ凡厥有生均乳(スヤリ)同躰(ヲナジクシ)胡(ナンソ)
不仁(ナン)ト云ヘリ
○ほゝ云所銘を屋宇の高用ゝて欧陽公ゝ不仁の二
字とかゝもゝ殿の一字ゝ俗語ゝ俗字のゝ所と
堪能(タヘ)ゝ(ナ)ゝ(ラ)ゝ(ン)ゝ(ト)ゝ(ス)ゝ(ル)與叔ら克己語と敵味方の用
ありゝ所銘の作文とゝあり格ゝ陋室銘ゝ作者と
尾城の史官ゝゝ大崎氏の逸士ゝあり

渋笠銘　並序　　芭蕉翁

草の扉にひとりわひて秋風さひしきおり〳〵竹取
のたくみにならひ△妙観かかたなをかりて竹をさき竹を
まけてみつから笠つくりの翁と名のる
たくみつたなけれは日をつくしてなら
す心やすからされは日をふるにものうし
あしたに紙をもてはりゆふへにほして
又はりかへし渋といふものにて色をそめいさゝか
うるしをほとこしてかたからむ事をおもふ廿日すくる
ほとにこそやゝいてきにけれ笠のはしのなゝめに内にまき入外に吹かへり
ひとへに荷葉の半ひらくるに似ておかしき也
かの西行のわひかさか△坡翁雪天の
笠か○宮城野の露に供はれは●呉天の雪に杖
をやひかむ霰にいそき時雨をまちて
めてゝみすから殊に興す興のうちにて俄に感すること
ありふたゝひ○宗祇の時雨にぬれてかりのやとりに詠
せられけりて手つから笠のうらにかきつけ侍る

世にふるもさらに宗祇のやとり哉

○註ニ曰▲竹取翁ノ古文ハ万葉集ニ長歌アリ釜ルニ及ハス△作られく
るよニ歌の詠かなしきハいくくさもありとあり　△撰集抄ニ
わきちりゆくを惜まるゝあり。従生もとト云ハ其詞
ヲ互照シテ次ニ西行ヲ出スヘキ断續ノ文法なり△富士見西行
ノ絵ノ図ハ画師ノ家ノ秘密なり△東坡カ戴笠ヲ垂レ驢ニ乗ルト云
ル雪中ノ図ハ和漢ニ多シ○ならニ文集ノ言ハ前ニ出タリ
●詩仙叢話ニ笠ハ重シ呉天ノ雪履ハ香シ楚地ノ花　○宗祇
発句ニ世にふるもさらに時雨のやとりかな
○俳諧ニ云此絡を讀集ニも入てうかゝひしものやすらひあり
さりとて元禄甲戌の冬伊賀の西林庵に至りて
文稿十二篇の再校ありし此絡は此の一篇也
作れ流くの後語によする今やはせをの遺文として

傳聞の廉抹を論するまて風国か泊船集のことき
ハ麁抹合にまてよりて入ても信を一ハむかしをさかる
へきハ古文のそらひおかしきそとハ自筆の遺文
ありとも好とし好みよきふ時ハ俗路の指をあたふ
ルおほかたん厥後の選論をはたすまてと言う一般
作て笠のうらにおさめふハ祖翁の在世にあすさにいりて
伊賀より書みやの紀行まに出岩第九とゝもされて梓
にせふらの記華ありしころ望のり衆と中まてね
本貫寺非所見ゆけるに湖東の孟耶観に作こそすれ
笠塚の名にはされしハ洛の馬亭子か作れる笠あり
或ハ武江の翁が塚と今此翁の経冊と埋なりし書る
と謝の泊船集にハやとり甚とさされ故とかさりけるを

羽の毒器に使する沢山七つ揮物もとりのぶ世
とかられ来るまの代々あれ〻これ〻醍醐の用とも
なれ〻也

髮鏡銘

而佛

原夫世界之始者而無鍛冶鑄物師之臺爺
了其天圓地方也了万物各莫不具質含
德事高矣中不麼謂鏡物者傳儒佛神之
環而遠照国家之政乎近顯君父之道乎
況向明暑之鏡而男者持髮之不暴心則
女麼嗜用許之有塩數據而霖死起死松

之二業成月出度御代之輔了矣斯者和
五倫之中了則寔麼謂鏡之天下一者矣
抑從正月之重鏡五九添月月之光了則
不失四季折々之姿花不者水之成鏡乎
烏不者翟之采獸乎孰君不為風雅之便
欲者但聞儒門之孔夫子者七十而從心
所欲其建置明德之鏡而若繁之仔達者
不為麼樂而不濫乎哀而不傷乎程子麼
所謂屋美不時則可謂孔子無能諸之盧
實矣耶扨又佛家之釈世尊高懸置淨玻

璃之鏡而令眼地獄極楽了則八万大衆
塵五百羅漢塵為入一寸四方之箱被照
智恵之鏡而唯心浄土弥陀玄
此不遠與所刹夫神国之天照皇者生給
白銅之鏡則被為法岩戸之神楽而授給
于八咫之鏡居矣在有万之神遊連有
面白俳優之歌給則歌人連奇之家者不
知俳諧命有供神術而不崇鏡之御影
耶在有入道有懐入一寸之鬚鏡而客
者所見真鏡弥年者所業此指弥鬼魅之

連々波也鏡之山塵近了則耻
名而薄波而鬚塵不接増而可眼儒仏之
奥義探神道之秘密耶蛍火雪且弥卿
花味月而鼻毛之用心而已也

○註曰老子経天地之間其猶橐籥乎虛而不屈動
而愈出云橐籥八吹革也天地方圓八之前出
天下一作ト八鏡裏ノ銘ニシテ爰ニハ其銘ノ古風ヲ称ス若爻
以下ノ三章ニハ五倫ノ試断ヲ見ルヘキナリ ○在ヒ来ニ
為テ如ノ法ヒ為ルヒ ちりとやくりとしゃん
掬スルニ此五字ハ大和ニモ真名ノ用アリト云ハシ假名ハ水ノ鏡
ト續ク故ニ水ノ鏡ニシテ花ノ鏡ニ非ス真名ハ成ノ字ヲ

以テ水ト鏡ヲ隔ル故ニ水ヲ以テ花ノ鏡ト成セリ去ハ真名ノ
伊勢物語ノ人ヲ為彼知ノ歌ノ手本世ニ不不ト畢竟ト
ノ差別アリ但シ為ト矣ト六和詞ニ勘アリ△山鳥ノ我影ヲ
見テ其鏡ニ舞フ玄ハ花ヲ三寄セテ鏡ノ風雅ヲ云ヘリ△論語ニ七十
而従心所欲不踰矩△大学ニ道在明明徳ヲ云ヘ△論語
郷黨ニ紅紫不以為褻服註紅紫近於婦人女子之
服也△論語ニ関雎樂而不淫哀而不傷云ヘ詩経関雎
ハ夫婦ノ中好キ喩トヲ△大学明徳註程子曰虛灵不昧
以テ具衆理而應万事也按スルニ此結語ハ程子実学
ヲ語シトテ強テ我宗ノ虛字ヲ挙テ明徳ノ二字ヲ證又
ト成セル例ニ能諾ノ意地ト知ヘシ　△浄玻璃鏡ハ佛経ニ

出テ三世通達ノ喩ナリトヲ按スルニ此起語ハ朋輩ノ面影
ヨリ物ノ一字ヲ形容セレニヤ法ニ隙見ノ絶神ト称スレ
△寸四方ト心ノ方寸ナリ唯心モ已心モ此用ト知レ按スルニ此二
句三大和ノ真名文ニ句讀ノ訣アリ是ヲ漢文ノ字配リニ
云ハ被照ノ二字ヲ以テ為・入ノ上ニ置キヲ和訓ハ語路ノ
違アリテ上讀ハ十字ト成リ下句ハ五字ト成ル故ニ上ヲハ
字ト成シ下ヲ七字ト成シテ句讀ノ長短ヲ配ルナリ此等ハ
大和ノ新制衣ニテ例ニ倣文ノ国曲ハ返点ナキ故ニ和漢ニ
音訓ノ差別アリトヲ前撰ノ百花脚ニモ本瓜花ニ此配アリ
比丘尼ノ句讀ニ互見スレ△唯心モ已心モ浄土往ノ詰ナリ前ニ
アリ△去此不遠モ前ニ出ヌ
白銅鏡ノ則有化出之神是謂大日霊尊ト云ヘ大日霊ハ

天照皇ナリトツ▲岩戸ノ事モ八咫ノ鏡モ前ニ出タリ△誹諧部ニ
廣成古語拾遺ニ八十万ノ神於テ石窟戸ノ前ニ峯ヶ庭燎ニ
巧ニ作ノ俳優ヲ相與ニ歌ヒ舞ト云フ此俳優ノ二字ハ漢書ニ出
テ滑稽ノ優游トツ▲鏡ノ御影ハ姥ヶ第ニ在リ天神ノ
自盃ニシテ神酒ヲ供シ八坂ニ出玉フトツ摂スルニ此結語ハ
岩戸ノ鏡ノ影迎ヨリ御影ニ神酒ヲ結タルハ菅神ハ
本ヨリ風雅ノ祖ニシテ神変ノ和光ヲ道ナサラシヤ然ハ此等
ノ文法ヲ双関ノ絶妙氏互照ノ好辞氏称スヘキナリ
△作れく手には花ものこ時得あらは読へとらんて称かへらの
ふんかくきとそちうりとこそ俵辞洞て但言なを読くろえゆ
年とかくへて書るしとゝ有り○羈旅ニ読らはに出らて
あそひし年ふる句をきゃ書るし○今宮ハ草かくらり

読のえれとつたらゝにそ侶りの表九あけきせ花らり▲蛍雪
ノ二句ハ四季ノ用ナカラ孫康車胤カ学文ニ寄セテ儒佛
神ノ学道ヲ称成ントス例ニ俳文ノ意地ヲ知テ畠毛ノ
二字ニ着破スヘシ
○読ニ云は誹も雁宮へおもしろくて大和も真名も文談とも
いゝむけうて読の二字をもてかとむと此當用とはける
或を和訓の字をよりわり句読の長短とさしをさをかこれ了
と真名の説用とふさらんやはて一字句の称するもハ歌俳
の神と称をむさ鏡の俳諧を定かくれて儒佛の二読也
称さるにおかしき姿と俳諧の滑利といふ微中解紛
ことをことも作者とも例の注書仲ちにして誹を入道のは
の自称ありの命し

○傳類

竹夫人傳

良壺峰

むし〳〵琵琶湖の浮船よりかえるのひくこゑあり
帷帳のうちにひくこゑあり。蚊帳(レンシ)をたのみとせずして
四季の夜をもねむるこゝろ一ぱいの物なり。
竹の名あり竹夫人(サト)とよばれり。中心空虫の綿をとゝのへて
美女の形ちのごとくにさまをなしてこゝろ
まれて面をかたどりたるものなり。
をつゝむ。本六竹八のあるを合せもちて鏡とやらんのかゝまに

あひ鏡の音のごとくなり。よひられて寒をふせぐ
に力をつくすもの。世に寒暖の変化をとゝのへ
繁昌の大なるもの。まことに厨のおくにもうゑ貴
の妻子をやしなわるゝ。此敵性あれども
より仙女の実蓄堂とちなみて
ものをれば月のたらぬもの。
かりてあるべしあるべしとあり
人に物をまかなうこゝろ。
ゝ別れ。ものの人に竹の夜ぶすまとなり竹夫人
をとゝのへるゝ。秋月のかゝげをとゝのへ

春月のたゝ淋しく昔の上にあちこちむくひの陰
ふかくあるを見て園の梨をみて厨の花をみよ
もたらひわるるもあり木枝のこゝろかちに
今こゝ春の月はあこゝもいとやさしいろる高き
一本ゆたかにもしけるとこゝに第二の拍子おもてせ
のちこゝろやまたこゝ船のうきはちたれて長安
の市北山野宮豪屋の内くとかれくあるよ
世の三月もかりてきにふくゝ光とゆの花はけるもだる
凌雪の世北ゆの沈ゝとたゝこゝも赤髭の長ゝ
あゝ山云ゝ宮ゝかゝえれ石牛洞のゝ山家

髭の間茅と伝ふゝ名とゝ女ゝかゝれ
冠ゝ花さゝ海ふゝ稽ゝ昭華と寵とあゝ
ゝ人ゝ長房のすゝこゝ洞のいゝ家ゝ
きれゝ芙蓉所の芙蓉龍ゝあゝきれゝ
茅ゝ成茅ゝん煙掃のゝ梨
○註曰△竹夫人ハ抱篁ノ雷陰名ニテ卧内ニ暑ヲ避ル調度ナリ
或ハ竹奴トモ青奴トモ云フトカ ▲翌習湖ノ字ハ長者ノ
竹生嶋ノ辯才天ヲ指テ竹ト夫人トノ寓トス此等ニ傳記
文用ヲ知レシ△愛美ハ絢張ノ貝ナリ俗ニハ簇子ヲ用ユ和訓
ハ加久ヤヒノ意トソ△白雲鄉ハ東坡ノ詩ニアリ爰ニハ莊子
カ亟尚有ノ鄉ト見ルベシ▲竹ノ子ハ竹の子ノ初発ノ娘

とわてなかりしをくるゝまでありける葉ノ歌ハ前ニ沙汰アリ△木兵
竹ハ卜ハ里諺ナリ木ハ六月ニ伐リ竹ハ八月ニ伐ル支卜ハ六帖ニ曽
ノ窩谷ナリ△源氏玉鬘ノ巻ニ髭黒大将ノ詠諧アリ
肉太卜云ハ今ノ形容ナリ△更暮章ハ漢武故事ニアリ
前ニ出タリ○後撰集ニ秋風の吹よ竹けてしとかね
をぎの葉ならば音はしてまし●班女ガ扇怨歌行
ハ前ニ出タリ△長安ハ漢土ノ都ニテ帝都ニ和漢ノ帝
ヲ對セリ△山谷ハ黄魯直ガ標号ナリ石牛洞ハ魯直ガ
別墅トソ●山谷詩集ニ趙子充示ニ竹夫人詩ヲ蓋涼寝竹
器ナリ憩ヒ臂ヲ休ルヲ似タリ非ニ夫人之職ニ予為ニ名日青奴ト并ニ
以ス詩ニ取ル之ヲ穠李ガ四絃風拂ヒ席ヲ昭華ガ三弄月侵ス床ヲ
我無ニ紅袖ノ堪ル娯ニ夜ヲ政ニ要ス青奴一味ノ涼△黄竜寺ト云ハ

晦堂和尚ノ寺ニテ山谷居士ガ参禅ノ師ナリトゾ
○謡に云此竹を今く寓言なりし詠よりも移すて竹夫人
の栗原とせし人ヽ毫釐の進退とはしをし側の
訊諫と侍る是一流にて一篇の称とする事はおなじ事安
の意をとりてよみたる義の字をおもうし後ちれ
長安の市をとりて出弥は夏愛節の二字をしるゆ
よみたれば一篇二段ろしてしるまで髭はその肉たてと
りひかしこゝには赤髭須の暑病とする句●對字對ハ例なり
いなそ文對の中にて一格ろしてこれゝと隔對の絶句と
称をへし作者ろ深山中にて賀の金城もまもと
なる越の石勤に嫁官として良を姓として壷降
とあさきをとを詞書にて時覧の風土なりしと知

瓦器傳

河何竜

瓦器とは土を混ぜ流しの間ならしてその容器なるその性あり世と天帝此をひして非祇釈教悪世常の品手此なるべ
ふきりきりたれたりへの代北洲にあるとして隠城
伊厚の主とえひ何都常滑のことにいて頼いも
ひ焼焔としていつれも世族ありきた
長ちると我邦の重寶記るに土器とかいけと
訓きしるを陶物の地名なるいれい和訓を

瓦器（カハラケ）の二字を用ひて音訓の通語なるいと享保
年中に伊勢の国桑名の常陶
いと孤のひとりと後につ伊勢の国桑名の
ふるもんに和名のれいに作へむ況や釈教の
ものをもて燃灯仏の供物として貧女が一灯と
かいしより千二灯と万灯といつれも供物
ふくてあるなむ世の蓮華に入の時多くは釈
の姉妹と称ひしもむこ入の時多くは釈
弟とかさりてこれなるの業花とたとへきを
一名の酒器とも八物なれとも本の名といふ

古人のつかりもしたる一くさむら中山の雪とは
来鶴のさしとてとれたらくなれたる一ひとを
伊勢とは陰原行とは北おもはれてを一隔の流
又一ぞ民をとるの神とわるとは絶
ものの品とひるかりてを古をとる風の風を
ふれるとはものをとは遼陽の買吟とは仙をんをして
表秋の名をとるとは和とひわ和至て高は郭
の法とやもるてはいを遼東をいさるとを
三分饅頭の感光とは遼東をいさるとを
有情非情ふるとは人のひとをとるとは家ふの

以を一宗ひとは作てあの灯筋の近大とう汁の
菓のとを分とをとをふとは和あれ
ちる果を鴨川の法とをとひてとは出に
かりやれいを屠て焼物の訳をとをとをとを
南京の深作を全補わをのかりの世あれと
世を常とをとをとは伝をとをとをる
○註曰俳部八後前より常滑八尾張より摺鉢炮烙ノ類
ノ名所より▲岩戸富八前に出タリ　接決経時有
貪女ハ二灯ニ歌作ト後世注本ニ特勝リ諸灯ニ云　●詩仙
最話宮詞ニ獻ニ君一盃酒ニ忘ニ亭百年身ヲ▲三国志
張遼字文遠勇力過人ニ吳ニ不怖者曰遼来ト則

小兒止啼ニ云く張遼ト饅頭トハ例ニ強弱ノ誤諧すり
○諺ニ云ける傳ニ例の寓言ふる所ニ瓦器の訓ニ
ふり神祇釈教悉く帝ニ使ふ所ニ新ニ寓言の術ありと
ふるもそれ物ニ
ふるもそれ物ニ
作者ニ寓云の廣語ニ寓言ニ
ニつ〻五蘭子ト称ニ

築然傳

東苑坊

ニ世ニ富ニ世ニ人あり
ニ花ニ

とふよ吟ふのはしと雲のゆふへかへと申みくらよ物ら
はなて境界きうに庇と飛ろるうありけれとむを
ばちをはうきなよはられ地入る時と投よかきうるもの
く
▲許由ら水歇とあれくと枝との木の枝よかきられて風よ
かけしとふくれをむけれく▲李白か謫仙人ほうたゝ
例の斗指るよ酒をなりて忘れそ童子の肩よひ
のぼり●杏花の酒よ入てをとらそ彼ら一斗の業菜とい
ふ伯ちろうと今か此山里よ風よ瓢箪の浮名とかく
て世をはくれんと飛ちまとあひるうるや△金壺玉瓶の
寿よあまて山木水によれるひとをみしもらんと汝と

あきるそくもゆしくをくよおもきうまれく汝とら
あむもよむ西も

○註 △音話トハ久チハ。。

三線トスイ蝉トスイ銭トスフ類ハ音曲ノ通ヨリ訳文ノ一名ナリ砂鉢トス
中ノ音話ナリ都久念トハ万葉假名ニシテ都久ト筆ト
ノ両用アリ大和詞ノ後勘ニ見ルヘシ▲擽集抄ニゆどの坊
夏アリ前ニ出タリ △論語ニ三十而自立ト云●古今旋頭
歌アリ前ニ出タリ △許由力瓢ハ前ニ在リ處ニハ
はれく竹の詞ヲ採レリ△李白ヵ滝見図ハ世ニ多シ飛流
直下ノ詩ニ據レリトソ●飲中八仙ノ詩ニ李白一斗詩百篇
ト云斗樽トハ此意ヲ摘メリ●公子行ノ詩ニ借問酒家何処
在ル牧童遥ニ指ス杏花村△神仙傳ニ尽ニ金壺玉瓶ノ之寿ヲ云ニテ

○俗云は傳を突記して論語と自立の二字とりて新の一字と訊諫をうけこころに築然の音語をうる心地合ひくうもやうん例のおうく例のさひくうに素人と突殺をとて山ゆ豪井氏うて俳名と猿ゆくうるを君の没後と春くうて濃の岩崎と隠遁をうるを

讀隠逸傳

佐其玉

むうし▲孫扇四の奥地にもお宗の孔孝と陸ゆ新放し肱とうけうる人と海こと陸者とうてうを大きうるあやまりもやうして今の世人

んを素演の此うり耳あれくれ九尺二間と七ゆを伊勢ゆ
ひうり孫るにむいしく耕をつくりと吟ゆ
貧乏此うを此ゆに婦ゆ
一念奔走のを陸ゆ
陸遁をうるゆを世ゆ
▲座の捐子のをうる人うもいやあり頼くうを市中
と書ゆと吟て芸供ゆ月の書ゆとうる人月雪
のゆゆ風此な達とゆ
おうく▲松花を此をいと
のをもあれ。秋のかつ

の源なりと或は栗人とも栗孫とも栗孫
その栗孫と称へ人へいはゆる唯心の境界なり
かくれあるはと已心の方所にあらずして和漢
人のもとめとする所医傳とあこもとて今所也
○註四人所れく竹こん栗栖すとあらはるる
入るる作りとあるべし○曲肱ハ論語三ノ雑飯ハ其
段ノ取意なり　△医ノ相子ハ栗栖野ノ結文ナリ
いもものもる人なりつれそ侵ゆ〜きと相ようふと云ル其歌
ノ歌入なり　△孫語拾遺ニ〜より我ゐる唐人の孫孫
あくもあれと麗キメラもの方孫と詞ハ元書のあるを

てもありしかはるとも一行ばかりなれ△松花堂ハ素人繪ニ
シテ多ハ序成ノ墨繪なり○古今集ニ秋のもとて月の光
の方ともちるひとりとしてはなりと　△名所
栄耀ハ盛生ノ故事なり前ニ出タリ
詞なり前ニ出タリ
○ほと云ハ作りたれく竹の孫栖野のはたよりもて
和漢の源なりの方孫と書ハ傳ノ孫なれ
所勝と云るさむ〜ことなれ他ノ方ことなり
歌挫の孫拾遺とのはたよりもて
とする古文の例なり　△孟嘗君傳ニ読
て孟嘗の廣なるとも作者を依仮
ずして家ことに代の風流あるべき

笠傳

井童平

天地いまだひらけざりしときは男女の区別なく素盞嗚尊と天津彦根の神ありてはじめて掃部をもうけ給へりこれの給ふまうけ給ふと作者の国と名付給ひ高天原の国と伯州とをつくる世界に男女のをこりあり

つくりたまひて白敷(シキテ)を敷給ふ敷布ときこゆ神と

流れ出るより天の磐船に乗給ひ人間の国に生れ給ひ

●笠傳とひらけて。笠傳のこゝろをもて民間に

やうけてを菓笠傳は塵よけ日よけ飾物の

ひ美しきもの卑しき名とあり百人一首の

い姫はおらの山かの岸とあり大内裏

を飛いさりて第八の宮たちふ

さりた櫻(ヒヤウ)樹笠とてふ和を山寺に咲たるを

紫色樹の歯に咲たるを花笠とて

やはらかなれて暗闇の奥に咲

あるちりの花をたゝらり廊下に咲

ちうれた馬に乗つれつ往かれつ不ちう

ち物語に性悪(ワル)の名に咲たる笠くさ

いうれきたる屋牛もはるかに此名のくはつて公を
帝位の沉中もあるくはうをあつて殊の家と
もくへあるを思ひたるに尾にあられあるい石蓋
の振とかくまれ果をなかやらの家くて清物醤油
くもつられく菜漬の中ものうを用をてる彼を
一類なかるる中に行家くはいうをんつをれた
今ちかくなかくなを市中にあるくあるを吹
ちる秋のゆを金を信迄のんをこれをてやあをこを
なるうちをなるまをあるをもを法用百あるくちをを
いろ〳〵法譲信のを書をあひをを。むもちをく

院の法所をぱのうをやつををくをあくかくをを宮
ちをくをおうをををとを塵のけ世をいをふをうをを。
の芸能も遠をを。▲国ぱををの今をををを和尚
とをををををぬををの泡掃をおくををれいんのをを
掃をををを行のうをを物ををぱをををを。むをを
をををのあをををを。豊干ぱ四職国
い我をかくををに霜ををひをを村の名ををむへを
つをに掃作のあやをりをを膳ををれをを
あをををとをひをのを浮世の煙ををに立ををを
苗門の名を流れをむぱをを常住のををあを

人も菓子のかたちあれば一ぢ二ぢのなる人
もあれば分めたりとぞいふ
○註曰●三躰詩奉帚平明金殿開云々此詩は宮女の奉
ゝ様なり帚ト箒ト八通用トス○万葉に地蜘蛛の物
のくもの糸ゝ△老子経に和光同塵云々△漢武ノ箒木八才ニノ美女より
歌ヲ以テ名トセリトフ△妙葉秘傳抄に擾掃箒を右キヲ
賢レテ痳病ノ妙薬トセリ△古硯録豈非鉈ノ苗時
而鉈者ノ矢手○胡詠ニ云ノ如ノ鉈ノ苗ヤ矢ノ手ト
けまもそうるるもおくれんとかなしみ我ゆゑ知くしも掃スル此一
句ハ之前ニ隠逸ノ起結トスイ又ニ和漢ノ文法ニ類系
タル此等ヲ鎖詞ノ絶妙ト称スベシ▲盆譜寒山ハ常
ヲ携ヘ拾得ハ巻物ヲ持ル細笑キスルニ及ハス●寒山詩可笑
寒山道而無車馬蹤云々▲四睡圖ハ豊干ノ傍ニ寒山
ト拾得トヲ昏テ虎モ睡リ居ル様ナリ豊干ハ前ニ出タリ
○俳諧云此俳諧ハ妙ノ富言なり
詩ヲ和ヲ人間の浮沉より王公后妃を交ゝてま
ゝ宮女方士もその外此れと汎連ヲ為ル
一篇の結文ゝとして箒ゝ轉婦子の三子ゝ以
又騒の論ゝ詩とおもはんれゝと新撰の奇
法ゝゝ筆ゝこすの舌ありといふ

○吊祭類

浪化公終焉記　　東華坊

こその神無月九日ハ故翁のきさ日なりけり此君
はかられけれはとてこそとかくかれ秋も霜月の十日
あまりは七も九日のはなる一七日此君まゐりて初に
それ忌のそち法くおとゐあかれと翌日六日なそ
ろも務なるよし其の比法師と言ふ名のくにあるもあつ
名月のあるいはいふ子や此ところと次ニの々記に操
あつても故と市人のまとりよ法をて林紅おもかし
に

やゝみてこそしれ我の立つりけれ
名月やおもふてふけ音も翁の音　浪化公
名月やかれて芋まてし柿の実　林紅作
ことおもむけよ翁の枕りてよこそ時そとてありかるま
てなよ此君れそ位館むつかしれと翌の日もやくちろ
まれは落つり比後なきとても此常の中ちも胸をも
ひとつしみはしよの法の名つハらり後にも此の耳かとろ
くもたてく比おとつれとあるさつをきり七月六日
七日の別れとてまみえてなかり秋の名残とあはれの
山のまよはあるいは泳ろかけ気のこちおひおもとそり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とのれいあるこゝをたゝちくさねをと
りむおていとはるてゝをれおりてゝをけれてをよ
こんをんとをかあけをりこゝをゝいひとあるをんちられ
いてをらくしやをよいをるあのををれむやしをを
こゝにをりて為の所にあんめてをのをゝはいをん
をやあ所のをちかをゝをん国をゝれたゝを一かゝよ
れをゝ上へをれをゝをゝ北神をゝをれをれいれをを
ををちをるかをゝしやはをゝをゝをれをんをゝむを人
のいゝをゝをのをるをゝやゝと屋内のをゝをゝをゝ予語をん
いあをとをゝをちをゝをもをゝく〳〵をゝをゝをゝちれをけれをゝを

ねのをゝくをゝちをゝを中をゝりよれのをゝをんやゝをゝかい
れをゝりをゝをのをゝるをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ人をゝやをゝをれ
いをゝをゝふむをゝをゝをゝふをれをゝんをゝるをゝ人をゝをいゝれをゝをゝある
おかいをゝあれをゝるをゝをゝをゝるの開をゝをゝをゝかをゝれやゝをゝて
弟寿の弟屋をゝやゝて。四をゝをゝかゝやゝをゝる三人谷
四をゝを三をゝをゝれ中をゝて三をゝをゝをゝれをゝをゝをゝれをゝやゝをゝれ
をゝをゝて中をゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ新
のをゝをゝをゝのをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
のをゝるをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
をゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ

こゝをおもひいでゝ弟のくゝをはぐくみたれ
ともいまはさほゝゆきあゝてけれはけふをかぎりの道
新文とかたるわかれとなるこゝ越の人はかりあつ
まりやすらるものむつまじかの春こゝ浪の表に作
てかりそめの風雅とむすびあつまりしあるの庵
室をかまへいとなみて此雅の筵あけむとすわ月
きもちれたるこゝはかりからの松をこゝ越へ
とおもふこゝろにもそのうちにのこりたるの花
あやまくてよかく入くるの月のうぶをさかめ山の
端ゝをこゝそゝめるんはたゝくふをもゝ

世をおもふ人あかくをもゝ月はあるあるあるあ山
の二年をもをくやゝ月のかれんとかゝるをこゝの花
をもゝあるあるをを近くれゝをもをるをかい
ていひをいれをえるゝ月をいをるゝ。をれをのをを
面をのをゝ年くの月ををををををををををを
はるゝかゝるをるゝ月をををををををををを
やつをくのをれをゝ四をくるをををををををを
月ををはゝををををあるゝ月のをくをれををを
ゝ越をゝををはをゝををををををををををを
ををゝをあをゝにゝ新をのをゝをゝをかをゝ月をを

たうゝゆくゝあり坂の関をこえゝしもあさゝんなを
ものかゝり咲くゝ比おうゝ見山のすゝしさをして。当
うゝの風はそくゝんむちあゝく多くさ雨の花と
ゝもるあゝしむしゝはさるれとさゝわゝ今比
新法さうゝ法ゝ比ゝはゝもの花ゝ比ゝ川
とかゝくゝていゝくゝ立川のゝゝりやおゝゝ久むゝなと
ゝんうゝゝをゝ風ゝてゝ来ゝ。ちゝやゝりゝん
秋の。新ゝゝゝ

世ふるうたの△あまのはらみてしらかはの
うたおりきりたちたるたにはこそらねうらあや
たちもおりかねてふるゆきのあはれまも
よもれはてるもさ△ゆ草ものの枝のたりてもあり
なのかはれ人くとたのしひたきとものひく
さはりきかけうたをそひろもれ

○註曰△浪化君ハ東門跡ノ連枝ニテ越中井波ノ瑞泉寺ニ住シ号ヲ
官号ヲ應真院ト云ク標号ヲ應々山人ト云リ 示寂ハ
元禄十六年癸未ノ十月九日ナリ ○行年ニ七十ニ成ラレ
ふる人あるへきもの角ふりはそれたるとうたよ
▲測明本傳備源中下ニ王弘ト仗ヲ以テ重陽ニ酒ヲ贈ル賦

アリ △采花地借ニ ふるうたの北阿闍梨もちてきのくてあり
△金沢ノ別院八安江町ニ在テ井波ヨリ十二里ナリ△親方ト八義
ニテ津田家ノ賀君ナル故ナリ○俳諧ハ相違ヒやすきものなり
春秋むさしふるのあるくやはらかなりとそひくてもれとよりあり
中萩とくこ子ノ子ノ寄ナリ男子ト女子トニ方アリ △ゆしきとく
寄書詞ニ忌々シキ古文トノ △亀菊ハ別墅ノ名ナカラ伊駒
万子ノ標号ナリ此公八金城下ニ交遊武備ノ名ヲ傳テ祖翁ト
頃孟ノ盟ヲ残シ先師ト忘年ノ交ヲ結リトノ○柘尾花集ニ
祖翁ノ雖波ニテ病中ノ吟ニ旅ねしてゆくとしかけ
ゆくるとあり△風雲ノ詞八謝吏運カ潤泊ノ遊情ヲ採ル
ニヤ書遠傳ニ尋シ△一向宗門ノ改悔詞ニ雑行雑修ノ志
ヲ振リ捨テノ唯一心ニ阿弥陀如来ヲ頼ミ奉リトアリ雑行ノ

二字ハ一字ノ要語ナリ△さんがくハ樵擧ナリ歌書ニハ載言ヲ云リ△論語ニ天之歩裏斯文トハ彼所ニハ佛諸ヲ云リ此所ニハ佛諸ヲ云リ然レハ此詩ニハ顔面ヲ早世ヲ含テ裏吾ノ幾ヲ取意セルニヤ△発花坊ハ洛陽ノ南ヲ十坊ニ分タル其一ナリ此時ノ會ハ長者町ノ玄来亭ナリトフ△法師ト東花坊ハ同ク祖父羽ニ具セラレテ越ノ行脚ノ約束アリトフ梅ニナリ其比ハ先師モ亡七八ノ年ニテ有磯海ノ撰集ニモ先師ノ俳諧ヲ擬ヒ玉ハト去来ヨリ内談ノ断アリ其状例ノ遺稿ニ残レリ○万葉ニ九辞世ニ石ニ枕やそうたのもし本るとうの浮世の月とんとてはるゝ糸山端ト八俱利伽羅ヲ云リ井波ヨリ西ニ當レリ△有磯海ト磯波山トハ一集ノ前後ナリ序者ハ洛ノ去来ナリ△花ことのはい方子ト

西撰ニテ又顔ノ發句ナリ○はんそのはい旋頭ナリ前ニ出タリ△かくふい荷擔ニテ歌書ノ詞ナリ△いちやきて壹早ナリ真名伊勢物語ニアリ○真萱ト第ニ慈鎮ノ歌アリ上前ニ出タリ其遊ハ東門陣ノ墓所ナル故ナリ△朝雲暮雨ノ四字ハ神女賦ヨリ亡後ノ面影ヲ墓ニ言ヒ梅ニ此一段ハ越ヨリ都迄ノ名所ニ寄セテ此ハ十月ノ九日ナレハ都ハ花ノ返咲トニイ真萱ノ風ニハ詩言ノ騒ヲ云ル古歌ノ採言モ古詩ノ摘語モ此等ヲ載入ノ絶妙ト称スレ○世ノ之張ニ学るゝあとさゝちやうもゝこふやうもゝさゝやこいもゝ○俊成娘ニあくこうちるあの松ゝうちこして新ゝあり花めら風△森陰ノ森ハ守宇ノ寄セナリ古歌ニヤ尋ヘし△松江ハ都ヨリ添ヒ来レル此君ノ乳母ナリ其比ハ七十

餘ノ老嫗ナリトフ　○蘭省戸山ノ一對ハ前ニ出タリ　△浄蓮社ハ井波ノ店外ニ在テ佛諦ノ開庵ナリ祖翁ノ無縫塔アリトフ　△淳風坊ハ十坊ノ一ナリ東六条ノ直ニ云ヘリ　○次テのあまりといふ蛍ノ縁詰ニテ歌ノ詞ニ多シ変ハ住ト須ト寄セタリ　△普史ニ文蘭玉樹トハ兄弟ヲ称セシ詞ナリ

○源氏ニ云ハ又ハ玉ハ此嫁蕪とりつゝて先祈ニ一代ニ命ハ

ゆくりとて上ハ一ハ此れ物ノ子ノ遺行ノ人ノ遺

のまに通とてくりて玉ハ此れ玉ハ此れ中に

駒方子の形ありて今此孫玉ノ記の中ニ侍ル玉ハ章

又陸奥の白論毛ハ此の時又に此の方の命より雲のまと

けて　霜の光八代君ノ追善集ナリ終末の花と熟詠ハ

俳諧の中ハ此と言ハ人と

俳諧ハ日本の新詩ハ中ハ一ハ此の感言ハ有ハ

ハ有ハ俳諧ハ此と俳ハ中ハ物語の

艶詞ハ此ハ松ハ此の優ハ此ハ此ハ湖月

の詞ハ此ハ此ハ此ハ此ハ和歌

此ハ此ハ此ハ此ハ俳諧の美言ハ此ハ天七

年此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ

宗ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ

賀の意ハ此ハ中ハ此ハ此ハ此ハ此ハ

此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ

ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ

和ハ此ハ此ハ俳諧の徴言ハ此ハ此ハ

ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ

る文と雅撰のはあり三塵家を例のかてしてこれ
ゑいき年の秋ちらら長栄のつれて塵家のる論も
み貴をけ小一れあるらしとけ江と竜孔達天ち
とこはしりや生作の文行るこけ類の艶曲も口文章あり
て辛古花歯をとゆるされ命れ今も絶まい
かくもやうにかくあられあれと未練の学をのけ艶
よふして邢鄭とあゆゆとまふ〳〵きやと本朝文粋
ともえり抜されこはしりめをほのり第〳〵きもあを
と今の文撰と再撰して新撰と當用の作文と
あちり法なんとゆるへやくくを俗借
の名とをれと例と言法の塵とちちて例と文章
の家とりひあく俗借ちときくけ皆のれ和して

雅俗をあくのとを地ちるときん滅と所謂の
古ちら他と一部の実新あんとを

雲鈴法師行状記

蓮二房

そ伝くこと雲嶺法師を奥州南部の素性て
本京家の侍郎ちる宮馬の麿と世とひ
始を武陵と雷杜子ゑ中比を湖東と
△玄井の社とむ伝ふ伝ふもあ
酒とのて色とこの中さるを敦沢の伝ゑ伝ゑ
つも年もうく面のうるもきをかた欲中の謫仙

ゝ者ゝも此のゝをゝいゝれあひゝ淋やゝたれゝさゝあのゝ
ゝをゝてゝくゝれゝて詞のゝをゝるゝ△裏の紙のゝたゝむゝ
不ゝあゝくゝんのゝをゝ多ゝ△桶の鹽のゝやゝるゝの
ゝあゝゝをゝあゝまゝのゝ木ゝ立ゝあゝれゝと情ゝむ一ゝをゝる
の情ゝ女ゝもゝあゝ所ゝにゝて之ゝ祿の中ゝにゝあゝん旅宗ゝ
ゝゝとゝれ柳ゝをゝ一ゝゝ法ゝ序ゝをゝあゝゝ△ゝ園ゝとゝるゝあゝ
ゝ濃ゝ柳ゝ庵ゝをゝ△ゝゝゝ

て能物子屋の杉の作りとく虎屋のちくりもくらもとや
おかゆそなたこ越し郎のひろとけこ伏見の図
こうもあきりけて△そこ宮山て撰集のえとあり寄
いさこ陸の鉄瓶湖とあつうこ三井の株にここ不
とりこんこの作と紫こと池て稲て竹の湯桶
鉄瓶とこれさし大津八町とゆきこありけいく宿
ゆここの風俗こ加ころこ地このむくこ世の
酒屋とこ京こ衣食此者あこれいあるいこ
京者の花こ洛の子とこここれく●長安市上の祭り
こあきこ花こ二こ也こうこ世こうこ洛んこ来るに

享保の初つこくこ越れのせ中こ清こ三年こ
こに中記の花とやこ中こ三日の風俗と
あここ相時こ洛こ新深こあこひて繁盛
人と命つらて酒こ世界とこ洛こて軍ここれの
ここくひとここいせいこけことかここ
花このここ中こくこ人くこ提こ中のはとこて
二月二日の早且こ繋ここゆあこ衣裳こあ
ここここの人くこ中こゆくあこと例の
所也能こ人こ也こて△掛也こ平也張籍こる中こ我
いか今此花こ入こ一生の說法とここ也こ洛こ我

息の老もまむれたるかくもはうひ所ゐたるいひ重
へをつゆ二月二日かをつてゆ辞世あり
ゆかりをあの世ゆ二月二日ゑ　平氏に帰
ゆたる一えのくをそえゑゐるゑの辞ゑひや安安
のゑ拾はをのをやをうへをあれゑゆあゑゑるへ
を奥をるくゆあをむくくあるゑ午のはいゑ
ゑ自ゑをゑて辞ゑる色ゑひをゑを拾ゑゑゑて眠
れるゑをくゑ我ゑゑ北条化和尚ゑかゑる
終栗のをゑをきけくゑりゑ雲中ゑ鈴の音ゑをゑん
ゑゑれゑ命の識文ゑあいて法のゑをゑゆゑ

ゑゑいゑを値遇の指縁ゑてはをゑく権化の
奇特ゑんをゑ法ゑを為ゑとにをて碑面を
洛の渡吾仲ゑ墓誌文を法をゑ

○註曰△雷柱子ハ武人其角カ標号ナリ或ハ晋子ニモ云リ△五老
井ハ湖東ノ中野ノ宿ニ在リ第阿佛ノ山荘ナリ梅ヲ植ル社ヲ造社
ハ戸山ノ白蓮社ノ詞ニ次ニ測明ヲ出スキ序ニ△測明傳ニ
為ル数次掌ヲ為ル五斗米不屈腰ヲ解テ印綬ヲ而歯故郷ニ
云　●歌中ハ仙ノ詩ニ臣ハ是酒中仙ト云ヘ其註ニ北天上謫仙人ナリト
云リ謫ハ流罪ノ事ナリ　△史記ニ賈生之處世辯若ハ錐
在ル嚢中ニ其先立見ル拔ヲ対ハ嚢錐ノキリ浸詣ヲ和ケテ
掏醢ノ倭語ヲ対セルヲトスイ潯トスイ包トスイ曲トスイル
字対意対ハ更ニ言ハス雖ト鱣ト鱣ノ自侍ヲ対セル格ニ轉対

ノ絶妙ト称スレ　△知七八義田中ミレテ洛ノ去来ノ従弟ナリ長崎ニハ知七アリト祖徂徠ニ称セラレシ俳特ナリ　○梓ノ張ト云イ引返トモ矢長トモ總テ古歌ノ載ハ入ナリ峯ニ及ハヌ前後ノ文勢ヲ見ヘキナリ　△老子経ニ善人ハ不善人ノ師ナリ不善人ハ善人ノ資ナリト云ヘリ師資ト八師弟ノ義ナリ　△不知火ト八琉球ノ花詞ニ和歌ニ数隻アリ　▲西行ノ歌ニ数隻アリ　地獄ニあつまくらのはあらしかな　法ヲ聞テ天狗のつとゝ　あるまくらあるてすあり　永沢ゝせてかれのこゝ　ゝとゝく　美勢ノ体ナリ　△童子経ニ七尺去不高蹈師影ヲ　●東坡詩ニ十年報ノ薪水ノ恩ニテ　△真春山モ入目記ニ雲鉢法師ノ俳佳ナリ　●歌仙八仙ニ長安市上酒家眠ト云ヘリ詩ニ李白ガ酒落ヲ云ナリ前ニ謫仙ノ起結ト知レ掛ケルニ羽翌湖水ノ

八行快ノ垂ケ　△筆ニ及ハヌ魂ノ術アリテ紙面ニ其人ノ字出セル所等ヲ形容ノ絶妙ト称スレ　△弔蛩賦ニ省核既尽ヲ盂盤猥籍タリト○辞世ノ支ハ両説アリ其比ノ訃音ニ公皆ヨリ浄土ノ今ナラントモ聞ヘ今云ヘル二月二日ヲ上モ聞ヘ異意ハ句作ニ違ノミ趣向ハ當意即妙ト称スレ　△往生伝ニ如ニ倚柱眠ト八遺終ノ安隠ヲ云ヘリ　△傳灯録普化和尚下ニ普化曰明日去東門ニ遷化セン郡人相率送出城ヲ師厲声ヲ曰今日葬不合青烏ニ中署ヲ四月自敬手棺ヲ出北門ノ外ニ振鈴ヲ入棺ニ而逝ス郡人揭棺視之ヲ已ニ不見ヘ唯雲中ニ鈴声ノ遠ク　△識文ト八手ノ来記ニテ仏家ニハ授記ト云ヘリ　▲涅槃経ニ結ノ之生値遇縁云　△墓誌文ヘ金口木舌迅雷東ニ天ト云ヘルハ子ノ謎文ナリ　按スルニ

金口木舌ハ雲鈴鐸ノ釈文ヲ假テ天下ニ能道ヲ觸レ
行ク徇人ノ喻ヲ迅雷ハ法師ノ秩鐸ヲ雷ハ鈴ノ鄉音ト
○徳ニ云ヒ伝ヘシ事ハ実録ニ出ル所ノ法師ノ法話ト云フ
事ニ冊ニ其ノ所ヲ詳ラカニ述ベ桂子ノ遺行ト
云フニ有ル所ノ逸話ニ依ル所ノ我家ニモ行人好
事遠ヲ有テ西ニ其ノ奥百人ト扣帳ニ記シ
あつまり給ふ所とめてり四国中国ニ巡路の軍ハ
の船借と云ふ所あるきもうとと天下ニひろめられ
ぬ者とまつ者を我とまつ我とまつ者を知る者の
行人あり称行人ニ一人も知れぬ人ぞ濃ニ実
ふ者を敬叔ニ車北轍トカリて北ニ行人の拙ふ
く越前ニ依ル所ニて男ニ手ニ孫の雲れ北れ北ニ

そこに行人の終ニ命ニ至ると本朝の選ニ重ニ鑑
は作ニ引傳とあげて北花行人と云ふ所ニ有る中の
倉敷ニ蓑里ニ云ふ男あり北花の業北ニ
ニ西花行人ニ行ニ仲人の解ニ
ニ蓑里ニ自称のごとく同伴のごとく
ニ北徒あんもと命て同伴のごとく
蓮ニ北ニ有る伯ニ北ニ達ぬ
ニ云ふ人ニ北れ顔四ニ軍北の不幸ニ
説経の内意ニ楽して桂子庵の遺行ニ
ニ北ニ北れ北所の桂子行ニ
終ニ有ニ命ニ有ニ
の伝ニ北ニ行ニ有ニ

到来の暁まことりて坐脱立亡の自在なるはこれ仏の
酒色まことひろくかく仏供の優游をまねるや
和漢の法師まことあるこの市中の大法をたちまちて
かの八仙の詩まことる酒中の大仙まことを称ぜしむ也

祭二之界万霊文

渡部狂

南無之界万霊無貴賤有緑麼無
緑麼従儒佛老荘之聖賢至詩歌連俳之
亡者迄旅霖蓮葉一枚而不厭獅子庵之
侘者不重千抹香之臭不生於富魂之

花一言芳談之不事欠無則麻畳為
起尽俳優而不色文採一部之虚實今
懺悔学者嘲之所以矣懺悔者誘引滅
無量罪與哉切謂俳諧之馳走者不令素
麺不飾團子奠茶者入遇名花輪達
而茶漬者面々之減次才也斯言則乗佛
於之味線而為似口而為馳走共言語者
謂孔門之一藝居謂釈氏老家之口過居
花咲一體万用則実成万法一理與好此
故俳諧者令賛於談笑有諫笑言有道了也

作去言語之蹤有認虛認實人之假令抑
下我身而直人之鼻屢共言則爲似瓦器
置鍋而振舞針之和物乎尤有者認一言
之實而不知万物之虛故也不實之實與
不虛之虛者兩爲之道一致之秘法摩哉
就中俳諧師者常敬擬仏家之迂詐崩儒
門之真言譬則如尊夫名之仮人之不惜
孔子兮不泥釈迦兮蓋花兮毀鳥兮知其
日其時之変則忖擅那之拔嫌而欺其事
此事欲是以論語不慶謂君子可欺居倭

諾乎者謂詞之蹤敵歴所詛者所謂滑稽
之賛和繰五倫面通味也今夫謂懺悔之
大秘事乃者此度於文操之選場而註者
與評者之虛實也今歳南獅子窟之戸而
歌撲例之草稿月忽有二人之客而鶴髪
之叟謂鳥有仙居黄泉之男謂博聖司歴
博聖者實麼註者面而其面羅數鳥有者
何操評者顔而其容尤矣牽厭好思儒仏
之万巻則畢▲竭羅嵐之撲集乎麼上扉鄙
鎖而阿雖副入於鑰穴而如是我聞之

四字擴文殊普賢之智慧ヲ顯觀音勢至之通力ヲ其餘之天人魔竜王魔下在涅槃像之繪其後無為達人梟矣于然間儒門之洙泗則遠乍刪詩正樂近至自撰之論語而以述而不作之四字竊比於我老彭與者曰竊ヲ曰我ヲ爰操給一代之虛實則門人達者認例之實子而為指定高大夫六老與彭者寓二人之面影而所謂神変權化之師乎哉儒家之七師魔釈門之七佛魔可知有名無相之證據人也

物而癒釈迦孔子之文而今穿鑿證人之名判則為似折檀林喘之中而詰言葉之散乎以耳於聞万巻之表以心知一字之叢了哉于時身有仙魔博望司魔矣々瓶合而不諱一部始終之骨折急度濱茶濱之一礼而博望者乗槎子之馬則鳥有者乗茄子之牛而飛去西之太虛了矣亨保丁未秋七月盂蘭盆日狂等嘘之輪川之流效源氏供養之摸様而和ヲ漢ヲ連詩ヲ誦歌ヲ斯者吊朐亡之跡歴今將所存

北世人麼慰此參文而朝臭之露兮稱妻之影兮不咎狂言綺語與也

○註曰△言芳談聖光上人詞迹世にあまねくあらはれる
やうにとゝのへいとなむる事なれども△俳優ノ二字ハ
古語拾遺ノ取意より前に出タリ△悲華経懺悔滅罪
無量罪云々　△花輪遠ト八芳市以立ノ印ニテ義濃ニ茲上長
ノ名産より　△論語言語字我子貢云々四科ノ中ノ一義云
より　按スルニ此一段ハ花宴ノ二字ニ用アリテ万一ノ轉回ヲ称ス
辛ナリ　△史齊孫賓傳優孟琴ヲ常ニ以テ談笑シ諷諫ス△優孟
賛善為ニ笑言ヲ然ト合大道ニ云々　△涅槃経佛法附属ス
国王大臣有力檀那ニ△阿含経頌知識ニ云々　按スルニ此ニ

段ハ諫若有五人ニ五訓諫唯度生而行之ト云ル孔子家語
○ノ取意ナリ　△論語言語若子可欺ト不可罔ト八字我ト為言
ノ巧ヲ責ルナリ△遊敵ト八双帝ノ詞ニテ物諍ヒテ遊ブカヲ云
より　按スルニ俳諧師以下ハ訓諫ノ意ヲ汲テ漢ノ武帝ヲ
諫メル事方朔牧皐ト面影ヲ云ルニヤ畢竟ハ例ノ
面通味ナリ　△大論仏経ノ選場ハ行林精舎ノ異称
羅嵩ナリ阿難モ四条ノ金ヲ表テ鑰隙ヨリ這入テ
仏ノ如ク説法セシニ大衆ニ之疑アレハ如是我聞ノ發語ヲ置
ケリトノ述而不作ノ辞宜ヲ寡スレ△論語序乃叙書ヲ
傳ニ礼記ニ刪詩正樂△論語述而不作信而好古竊ニ
比ス於我老彭△註老彭高賢大夫見大戴礼　按スルニ
儒学者ハ其書ノ実否ヲ糺スヨリ其人ノ有無ヲ究ントス総

テ、宋学ノ費ト云シ△山崎ノ人ノ一貫説ニ舜紀ト世本トヲ引テ
老彭ハ二人ノ竈名ナリ老子ト彭祖トノ面影ニ富テ古賢ヲ信
スルノ證文トフ △孔子ニ七人ノ師トヲ云ヒ釈迦ニ七仏ノ授記トヲ云
ハ總テ諸経ノ取意ヨリ細拳ニ暇アラス △檀林ト八軽口ノ噺ヲ
云リ宝因風ノ誹諧ヨリ天和比ノ常談ト成リ △俳語指南ニ
此茄ヲ馬牛ト訓ス茄子キヤス新瓜コウス子ト八禅録ノ詞續ナリ △俳牛
供養ハ訊物ノ名ニテ俳牛ニ石ヲ始トシ六十余帖ノ富名ヨセヲ
拳テ石山ノ潮水ニ供養セシ様ナリ △其訊ニ名ヒ名ノ名稿
書ノ気ツレヲあらくさくあるとあり △風云和言綺語ヲ
於テ第式部ノ後ノ世ニ出テ侍ルモあり
○俳云ハ今ノ諧誹ヲ文操一部ノ新面ヲ
傳書俳諧ノ新論ト名ケシ俳文深ノ此式ヲ写ス

ヒ物ヲ用ヒ物ヲ用ヒ物ヲ用

それ通用とひおうとも〻我国の手活ちれい
和漢を一枚の繻子にうつくしく郷子庵の文庫に
写主て爾雅篇海の内にうつしとらうとて
伊呂波韻一冊をてにはの埒とあけむる色

享保十二丁未秋九月如意珠日

書林

洛陽寺町押小路

橘屋治兵衛梓行

俳書目録

一本朝文鑑　假名文集　全部十卷
一俳諧十論　新古評論　全三卷
一和漢文操　假名真名文　全七卷

一發願文　東花坊撰　一卷
一夕歌の秋　一卷　円入
一菊十歌仙　一卷　伯兎
一梅のとり物　一卷　吾仲
一東海道　二卷　何狂
一雜陳二百韻　一卷　蘇母
一七ふくれ　一卷　里冬
一山琴集　二卷　面今
一八夕暮　一卷　乃露
一四幅對　一卷　東恕
一獅子物狂　二卷　山隣
一淡雪集　一卷　鷺洲

俳集目録

一新撰大和詞　日本耿語辞　全二卷
一十論為辨鈔　十論秘説　全三卷
一和漢百花賦　全一卷

一本朝八仙　二巻　昇角
一鎌倉海道　二巻　江戸千柳
一糸魚川　一巻　九蝶
一八鳥放生日　芭蕉翁五三回忌　三巻　野城
一鴨矢立　一巻　鴻笑
一桃首莲　三巻　里丸
一芋叩ら　一巻　一守

一三千化　芭蕉翁三十三回忌　四巻　蓮二
一鰤俵　二巻　虚白
一姫の式　一巻　兎路
一雪白川　二巻　魯九
一文月往来　一巻　嵐枝
一こんにちは　一巻　吳天
一六の花　一巻　以之

寺町通二条下ル町　書肆　橘屋治兵衛板

国立公文書館
National Archives of Japan